

先輩、知友に恵まれた父

大平裕

父は、内閣・自民党葬、香川県民葬、そして地元合同葬を通じ数え切れぬほど多くの方々よりお別れをいたしましたが、振りかえれば、父ほど、先輩、知友に恵まれた人は少なかつたのではないかと思われます。それは、私どもが存じている限られた範囲でも、つらやましく感じられるほどのもでございました。苦学の時代、在官の時期、さらには二十八年間に亘る政治を通じて、晴れの時も、雨の時も、父は先輩知友の方々の変わらぬご友情と「好意に支えられて参りました。みなさま方のお力添えがなかつたら、父は決してあのような大任を負う光栄にあずからなかつたこと」でございました。

それだけに、父はつねづね、政務公務の多忙にまきれて、みなさまの「いつした」厚誼に十分においたえできなことを苦にいたしておりました。晩年には、政局の安定をはかり、国の政治の路線を確かなものにした上で、できるだけ早く職を退き、これまでの恩返しをしたいとたびたび口にいたしておりました。親しいみなさまとゆくつなく語りあつたり、一緒にゴルフを楽しんだりしたいとこう気持ちもあったことでございました。郷里の讃岐の野や山も父を呼んでおりました。察するに、父は七十歳を政治生活の区切りと覚えていたようだ」なこます。そして、それは、私ども家族もひそかに願つていたことでした。

しかし、神はそうした余裕を与えることなく、慌しく父を天に召してしまわれました。もはや父がみなさまに直接にお目にかかるお礼を申しあげることはできませんでした。私ども家族は、父がみなさまから賜つた「恩の大き

さを考えて身のすくむ思いをいたしております。いまはただ、私ども一人一人が立派に生きて行くことのみが、じる恩の万分の一でもお返しすることになるものと思うほかはございません。

父はいま天に在つて、すでにここに籍を得られた恩師の中井虎男先生、上田辰之助先生、また官界への扉を開いてくださった津島寿一先生、さらには政界の導師、池田勇人先生をはじめ、多くの恩人の方々にお目にかかり、往時への感謝を捧げつつ、心おきなく歓談を交わしていることじございましょう。また、生前最も愛しております長男正樹、親代わりをつとめた義父鈴木三樹之助と三人で愉しかった想い出話に興じてゐるかとも考えます。思えば、数知れぬ方々に、鍛えられ、励まされ、愛され、そして後輩の方々に慕われた父の一生は、恵まれた、幸せな七十年でございました。ここにみなさまに深く感謝申し上げる次第でござります。

さて、さらにその上で、このたびは、有志の方々の尽力により、亡き父を慕つ回想録の刊行計画が立てられ、その第一巻、追想編が一周忌を前にして刊行されるとのことでござります。じむ多忙の中に追想文をお書きいただいたみなさま、刊行の実務にこ努力いただいたみなさまの重ね重ねの芳誼に、家族一同お礼の申し上げようもございません。

事務局からは、私にも謝辞じともに何か想い出を書けということですが、思いだすのは、すでにみなさまがじ承知のことばかりでござります。老若を問わずお客さまの来訪を歓迎し、家族の団欒を楽しみ、静かな読書を好みました父の姿が浮かんできます。学生時代、私が友人を大勢連れて帰つて、賑やかに騒いでいる、必ずその仲間に入つてきてヨーモアを飛ばしながら、よく若者たちの話を聞く父でした。親しい友人がわざわざ訪ねて下さつたのに、家族の手違いで、お会いすることができなかつたとき、きびしく叱られた以外には、怒られた記憶もありません。優しいというか父は子供たちにもシャイだったのではないでしょうか。 (故大平正芳氏次男)